

上稻田の仮説の当否を議論することは生産的でないにちがいない。むろん稻田自身とて、太古の昔にのみ思いを氣楽に寄せるのではなく、「つねづね羨望にたえない」(三七五頁)最新の考古学的知識を参照することで、そこへ遡りうる時期の区切り目を入れる慎重な姿勢も取っていることも、われわれ読者は知つておかなくてはならないだろう。

四

ところで深読みに過ぎると笑われそうであるが、本書から日本人・日本文化に対する危機感を抱く著者の嘆きが聞こえてならないのは、単に評者一人の錯覚であろうか。「昔話の源流」を探索する旅に出立しようとする著者の動機は、まちがいなくA・Tや『民間文芸のモチーフ索引』のアジア版完成を願つて

書評

松村賢一著

『ケルトの古歌『ブランの航海』序説』

飯 豊 道 男

索引

本書が取り上げているのはアイルランドの古い叙事詩と物語である。近年ケルトに対す

のものである。しかしそれだけではなく前著『昔話は生きている』の題名からも分かるように、「民族の伝承に裏打ちされた、最大多数の語り手たちの、人生観照の結果である」昔話が消えゆくとともに、日本文化の実相を知る材料が消滅する危機感の中で、昔話を通して語り伝えられた日本文化史・人類文化史の構図を描くことについたと考えてよいだろ

う。

最後に評者の関心を反映した書評となつたことを、著者・読者の皆さんにお詫びしつつ、今後、著者の後塵を拝して、評者も微力ながらも『民間文芸のモチーフ索引』アジア版作成作業に精進することを明言しておきたい。

二 『マールドゥーンの航海』と海上巡礼

第一章 冒險と航海の物語

二 『コンラの冒險』と異界行

二 『マールドゥーンの航海』と海上巡

第三章 『フェヴァルの息子ブランの航海と冒險』

一 写本について

二 韻律

三 原典

四 日本語訳

第五章 異界と海界の彼方

一 アシーンと浦島伝説をめぐって—

初期アイルランド文学研究のための基本文

る関心が高まっているが、これほど大きなうねりとなつて表面化したことはかつてなかつ

た。これはヨーロッパ自身が始原に遡つて自己検討するようになった動きの反映だろうが、こういう時期に英語文献の翻訳とか研究の紹介、敷衍でなく、難しいケルト語に直接取り組んで原典を日本語に訳す仕事が出てきたのは意義がある。

本書の構成は次のようになっている。

第一章 冒險と航海の物語

ず第一章で氏は古代アイルランド文学にどんな説話群があるか、話名をあげ、そこに異界を描く冒險譚と航海譚のジャンルがあるという。氏の筆は簡潔で、全体の構成からも研究者向けに書かれているように見える。その研究者はアイルランド文学研究者を指すようだが、補遺に浦島伝説があり、そうもいいきれない。というより説話群のうちで異界への旅をテーマとするジャンルを選んだのは、浦島伝説と結びつけたかったからではないか、専門研究者というよりもっと広い読者を想定していたのではないか。そういう読者想定の揺れが文章のところどころに現れている。

一般読者からすれば初めにケルトとアイルランドの関係、古代アイルランド文学の古代はいつごろのことというのか（第二章のアイルランド語の歴史的区分では六〇〇—九〇〇年となっている）、古代アイルランド文学の概観といったようなことを書いておいてもらった方が著者の問題意識も鮮明になり、わかりやすかつただろう。

冒險譚、航海譚といふ「この二つの文学様式が発展、成立する過程は、数多くの小島の浮かぶアイルランドの地理上の特色とか、ケルトの民の生活と歴史、また聖人の巡礼など

と深く関わっている」というが、評者がまことに書かれている。その研究者はアイルランドではケルトをどう把握しているのかである。

ドイツ語圏、特にオーストリアの口承文芸に関心をもつ評者にとってのケルトといえば、すぐにハルシュタット文化が思い浮かぶ。それは鉄器文化として知られ、ゲルマン人やローマ人より前にオーストリアに住んでいた先住民族だった。彼らの前にはイリュリア人などもいたが、先史時代にすでにすぐれた技術を身につけていたケルト人は岩塙の採掘にも力量を發揮し、ハルシュタットのハルは塩というケルト語からされている。ケルト博物館があるザルツブルク近くのハラインでも塩が採れた。ケルト語はライン川、アルプスなどドイツ、オーストリア、スイス各地の地名にも残っている。ハルシュタットの次の段階のラ・テヌ文化のラ・テヌもスイスの地名だし、スロヴァキアのボヘミアにも重要な遺跡がある。一九世紀に発掘されたハルシュ

タットの遺跡はケルト人が現実にいたことを認めたいのはアイルランドではケルトをどう把握しているのかである。

アイルランドのケルト人が大陸を追われた人たちの子孫であるとしたら、なぜ彼らは祖先のことを歌わないのか。そういう歌は伝えられていないかったのか。それとも残っているのか。口承文芸が伝えるる時期とというのはそんなに長くない世代の時間に過ぎないのか。伝承とは何か、というようなことまで本書を読んでいると考えさせられる。

確かにギリシャ人やローマ人がケルト人と名づけた人たちはフランスからハンガリーまでいた。遺跡に見いだされる物にはアフリカからバルト海沿岸の物まであって、その交易の広さに驚かされる。アイルランドのケルト

メージにあるケルト人はこのように古代人であり、山の人だった。それがどうして本書に見られるような海の人になってしまふのか。

人はスペインから渡つたという異説もあるし、いが、伝承地によつて異界の観念が変わること同じようにケルト人といつても大陸とアイルランドでは違うともいう。アイルランドで崇拜される聖パトリックはフランスから渡つた

ではないのだろうか。

『コンラの冒險』の粗筋はこうである。

王子コンラはふしぎな衣の女に不死の国に行こうと誘われる。父はドリイドにつれていた人に海辺で暮らし、造船技術をもつたケルト人がいたに違いない。それでもオーストリアのハルシュタットになじみがある評者は山の民と思つていたケルト人が、アイルランドで海の民として最古の伝承をもつことなどあるのである。

第一章の最古の散文冒險物語である『コングの冒險』の前置きで、氏は「神話的枠組みの中でケルトの神々やケルト特有の異界の住民たちが軽やかに、不釣り合いもなくうごめく」と書いているが、こういう神話的枠組みがあるのに、なぜ大陸から島への追放、放浪という歴史的大事件が歌われないのか、少なくともそれが伝承に影を落とさないのか、そこがのみこめないのである。

ケルトの冒險譚が目指す異界は海上、湖底、妖情の丘であるという。これらは同質とみなされのか、異質なのか。こうした物語の伝承には時代のあと先、伝承地の違いはないのか。伝承の時期、伝承地の言及がなくわからぬ

古い信仰と新しい信仰とのもつれた関係がここにはうかがえそうで、ドルイドについても兩者の関係についてももう少し言及が欲しいかった気がする。しかしそれにしても修道僧はなぜこういう口承の物語を書き写そうとしたのか。意図はどこにあつたのか。

彼は二度と戻らない。

このように至福の世界が描かれてゐるのには、語り手も聞き手も男ばかりだったせいなんか。女性が語りの伝承に関与することはなかつたのか。

死をまぬがれないものと不死の世界との間には海があつて境界をなし、そこをガラスの舟とか水晶の舟といわれる舟で渡ることになつているのが興味深い。しかもふしぎな衣の女は二度目に来たとき、「正しい人」が海辺に来て、ドルイドの呪文を破るだらうと予言し、その予言通りコンラは海のかなたに行つてしまふ。「正しい人」というのは聖パトリックを暗示し、筆写僧が口承に書き加える。

たものらしい。となると至福の世界はキリスト教によつて得されることになるのだろうか。五か所を回る巡礼様式になつていて、そこに

次に、冒險譚と対照的な航海譚『マールドゥーンの航海』が紹介されている。

ニノサ（アラン諸島）の族長は他国を侵略する。そして女子修道院長を犯すが、帰國の途中他の部族に殺される。修道院長は男の子を産み、その子を親しい王妃に預ける。彼は三人の王子と一緒に育てられるうち、素性を知り、実父の仇を討とうと思いつつ、三人の里子兄弟も同行する。家来ともども仇のいる島を目指すが、一行は巨大な蟻の島など数多くの奇怪な島々をへて女人の島に着く。彼は女王と床を共にする。ここでは老いることがなく、労苦もない。三ヶ月過ぎると三年たつたようと思う。帰るのを引き止めようとする

この作品はマールドゥーンたちが海上の三

民俗的なモチーフと隠者が巧みに織り込まれているという。ここでもキリスト教の影響をうかがわせる修道院、聖パトリック、聖ブレンダンなどが出てくる。島めぐりでは異様な姿の動物たちが次々に登場する。これは伝承するうち恣意的に場所の数がふえたのだろうか。それとも数や変化の仕方には隠された法則性があるのだろうか。

第二章は『フェヴァルの息子ブランの航海と冒険』を取り上げている。成立は七世紀ごろ。韻律についての記述はかなり詳しく、氏が力を入れているのが感じ取れる。そのあと原詩が全文紹介され、韻、表現技法、語句にわたる詳注がついている。

本文は初めに散文が九行。その後四行詩が二八連。それに三行と六行の散文が続き、ふたたび四行詩が二八連あり、また散文が六、七、三、三行あつて、四行詩が一つ、そのあと三行の散文があつて終わる。

フェヴァル王の息子ブランが快い音楽に眠りこみ、目をさますと、そばに白い花をつけたリンゴの枝が置かれている。どこからかふしぎな衣の女が入ってきて五〇の四行詩を聞かせ、海のかなたの島に、不老不死の理想境、女人の国にいらっしゃいと誘う。あく

平原に黄金の馬、深紅の馬、背に羊毛をつけた紺碧の馬が見えるといわれるが、あとで海が平原に譬えられている。鮭は子牛、羊に譬えられている。こんな比喩からすると漁業でいうより農牧で暮らす人たちに伝えられた歌のように思えてくる。蛇は災いをもたらす。マナナーインがカントンティヒャルと契つて生まれた息子はあらゆる獸、具体的には竜、狼、雄鹿、鮭、海豹、白鳥に変身できる。全然詩が大型の家畜が重要な財産だった社会がこの歌の背景にはありそうだが、魚の中で

は鮭という固有名詞だけが二度出てくるのが注意を引く。五〇歳のとき竜の玉石で死ぬと予言される英雄モンガーンがいまわのきわに欲しがるのは、ロー湖の水である。この叙事詩の作者（たち）の故郷はどこなのか、推定する説はないのだろうか。

ブランたちは舟を進め、女人国に着く。ある」が、日本の他界は死後の世界を意味する日ブランは船出する。同行するものは九人ずつ三隻の舟に分かれ、同行した同年の里子兄弟が各舟を指揮する。二日二晩漂うと二輪戦車に乗った男がきて名をマナナーインと名乗る、いすればマナナーインにモンガーンという息子が生まれるだろうという。彼は三〇の四行詩でブランの航海のさまを予言する。

ることが多いという。果たしてそういう切れどりか。英語では異界と他界をどういうのだろう。S・トンプソンの『民間文芸モチーフ・インデックス』では、冒険、航海譚に出てくるような異界の異質な時間の流れをF377「フェアリーランドにおける時間の超自然的経過」と整理し、F377・2「異界では一年が数時間と思える」例にアイルランド神話をあげている。この異界（荒木・石原訳では他界）の原語はアザーワールドである。F377・1ではそういう世界がパラダイスといわれ、「楽園における時間の超自然的経過」としてスペインの教訓話をあげている。教訓話を示すようにこのモチーフは中世の修道院で宗教講話用に集めた説話集中で、ラテン語によって広くヨーロッパに伝播した。起源はどこにあるのだろう。横道にそれたが、トンプソンはフェアリーランド、ザーランド、パラダイスという三語のうち、アザーランドをFO—F199「アザーワールド・ジャーニーズ」など、最も広い意味で使っている。異界は一筋縄ではいかない氣がある。ふしぎな衣の女が異界からの使者として何度も登場するが、ドイツ語圏の伝説に出てくる白衣の女には死がつきまとう。異界へ

の交通手段はガラスとか水晶の舟だったが、民間文芸にしばしば出てくるガラスとか水晶も死とは無縁でないだろう。二つの世界の間にある水そのものも深遠な意味をもつて、いやう。また島にしても死者が葬られていた歴史があつた。一九九七年急死したダイアナ元妃が邸宅内の池の島に葬られたのも墓荒らしを恐れただけではないだろう。島の巡礼行という発想にも死と通じるところがありそうである。冒険、航海譚で海の彼方のもつ多様なイメージの中で至福の世界が殊更に強調されたのはなぜなのか。

個人的にはいつも教わることが多い同僚の本なので、仲間褒めにならないよう気をつけたが、これは信頼できる刺激的な労作である。
(中央大学出版部 二五七五円)
(いいとよ・みちお／中央大学)